

授業実践に基づくCOIL のインストラクショナル・デザインの研究

安西, 弥生

<https://doi.org/10.15017/6770266>

出版情報：基幹教育紀要. 9, pp.183-190, 2023-02-24. 九州大学基幹教育院

バージョン：

権利関係：© 2022 Faculty of Arts and Science, Kyushu University. All rights reserved. The publisher holds the copyright on all materials published in its journals except special issues, whether in print or electronic form, both as a compilation and as individual articles. All journal content is subject to "fair use" provisions of Japanese or applicable international copyright laws.



授業実践に基づく COIL のインストラクショナル・デザインの研究

安西弥生^{1*}

¹ 国際基督教大学, 〒181-8585 東京都三鷹市大沢3丁目10-2 (教育研究所)

A Study of Instructional Design for COIL: A Case of Bilingual Students in Media Class

Yayoi ANZAI^{1*}

¹Institute for Educational Research & Service, International Christian University, 3-10-2, Osawa, Mitaka-shi, Tokyo 181-8585, Japan

*E-mail: yayoi.wikiwiki@gmail.com

Received Oct. 31, 2022; Revised Dec. 1, 2022; Accepted Dec. 1, 2022

This study is a report of Action research on Collaborative Online International Learning (COIL) conducted in a media class at a university in Tokyo, Japan. COIL has been drawing attention from language teachers as an effective way to learn a target language and intercultural communication. The students in this class were bilingual in English and Japanese. The class used English as a medium of communication. Despite the students' language proficiency, they did not have much opportunity for authentic intercultural communication and media use in global settings. So, there was a potentiality that COIL would enhance students' learning outcomes. As for instructional design for COIL, there were not many case studies in which Japanese students conducted the same presentations to different audiences in consecutive weeks. However, teachers often regard students' reflections were essential for learning. Under this condition, this study aimed to identify the effects of COIL in successive weeks at different universities. Thus, this study seeks to answer the following questions. First, what are the effects of COIL with two weeks with two different universities? Secondly, what are the Japanese students learning about intercultural communication through COIL? The results from the Action research revealed that students could improve the quality of their English presentation by applying their reflection. There was also meaningful learning about intercultural communication through COIL.

1. 背景

本実践研究は、大学英語教育におけるオンライン国際協働型学習(COIL)の実践報告である。オンラインで海外の学生たちと ZOOM を使い、同じ時空間で同期的にプレゼンテーションやディスカッションをし、協働することは、アクティブラーナーの育成に役立つと考えられる。COIL は、Collaborative Online International Learning を意味し、協働、オンライン、国際的、学習がこの概念の基本となっている。文部科学省では「平成30年度大学の世界展開力強化事業—COIL 型教育を活用した米国等との大学間交流形成支援」の研究プロジェクトを公募し、審査の結果21校が採択された(文部科学省,2021)。教育工学の領域でこの文部科学省の助成を受けている COIL 型教育の例としては、TP-COIL がある。このプロジェクトでは、東京外国語大学、国際基督教大学、青山学院

大学が、カリフォルニアの複数の大学と COIL 型教育や留学、インターン等のプログラムを展開している。本実践報告の安西は TP-COIL に青山学院の教員として参加し授業を行っている。一方で、先の 21 校には含まれないが、九州大学 The Self-Access Learning Center (SALC) では、九州大学とサンノゼ州立大学を結び 2021 年にオンライン交流を行い、アメリカの社会や文化について学ぶ機会を学生に提供し、COIL 型学習の機会を広げている (九州大学 SALC, 2022)。本実践報告では、文部科学省の助成を受けているか否かに関わらず、COIL の示すキーワード「コラボレーション」「オンライン」「国際」「学習」という 4 つの要素を持つインストラクショナル・デザインを COIL と定義する。

オンライン遠隔教育は、教育工学の領域に含まれる。Moore & Kearsley (1996) は、Transactional distance 理論で、「距離は、地理的なものでなく、教育的な現象である」と述べている。つまりインストラクショナル・デザインや、インタラクションの度合いにより、距離の認識が変化する。COIL における距離は、例えば、ある時点ではアメリカを遠くに感じ、また別のある時点では非常に近くに感じるというように、柔軟に変化する距離である。インタラクションには、学習者と学習者、学習者と学習内容、学習者と教師の 3 種類がある (Moore & Kearsley, 1996)。Wu, Yen & Marek (2011) は、オンラインビデオ会議システムを使った英語学習を探索的分析と構造方程式モデリング分析を行い、インタラクションが学習者の自信や学習意欲や学習効果に影響を及ぼすと述べている。インタラクションは、学習者の学習意欲を高め、学習成果に影響を及ぼすのでインストラクショナル・デザインでは重要な要素となる。またオンライン遠隔教育では、社会性と情動の学習も起こる。これは英語では Social Emotional Learning (SEL) となる。SEL により育成される 5 つのコンピテンシーは自己認識、自己管理、社会に対する認識、関係構築、責任ある意思決定である (Collaborative for Academic, Social, and Emotional Learning, 2003)。

日本の大学英語教育では、オーセンティックで国際的コミュニケーションができる COIL 型教育に関心が高い。本年 2022 年に行われた国際会議 iCoME では、Asakawa (2022) が、持続可能な社会を目指し日本とタイの食料に関するミニプロジェクトについて、Anzai and Shimizu (2022) が、日本の大学の英語授業と、米国の大学の日本語授業における COIL 型授業のアクションリサーチの発表を行った。また大学英語教育学会国際大会では、Shimoyama 他 (2022) が、オンラインを活用したこれからの国際交流に関するシンポジウムを行った。実践報告では、Anzai (2022) が、オンライン国際協働型学習(COIL) —東京外国語大学、ICU、青山学院大学、カリフォルニア大学アーバイン校のケース・スタディーに関して発表し、Shibata (2022) が、COIL を社会的・認知的スキル (SEL) の観点から発表を行った。コロナ禍以前では専門家により行われたオンライン遠隔教育であるが、コロナ禍により一般的な教育手法になった。このオンライン教育を国際的なスキームにした COIL 型教育への関心が高くなっていると考えられる。

本研究の研究方法であるアクションリサーチは、「教員が主導する授業で、教員の教授方法と学習に対する理解を深めるために行い、その結果、授業方法に変化をもたらす。アクションリサーチの典型的な形としては、教員が自身の授業内に小規模の調査を行い、計画、実践、観察、省察の繰り返しがある」と定義される (Richards & Lockhart, 1994)。本研究は、Nunan (1993) のアクションリサーチの手順に従い、実践報告をする。第一段階は問題の確定、第二段階は事前調査、第三段階は

仮説の設定、第四段階は計画の実施、第五段階は結果の検証、第六段階は報告である。

2. アクションリサーチ

2.1. 問題の確定

第一段階は問題の確定である。コロナ禍により、教育を止めない手段として、オンライン教育が急速に普及したが、1. 学生がグローバル社会を生きているのにも関わらず、同期型オンライン教育が国内使用で、グローバルなコミュニケーションの実体験が不足している。2. 学生は、オンライン、対面に関わらず、異文化コミュニケーションの直接体験する機会が乏しい。このように、メディアの使用方法和コミュニケーションの経験値の問題がある。

2.2. 事前調査

第二段階は予備調査である。本実践は 2022 年前期に行い、日本の大学では4月に始まり、アメリカの大学は4月が後期の最終週になるので、授業内で予備調査を行うことは難しかった。そこで、日本の大学英語教師と米国二大学の日本語教師のこれまでの遠隔教育の経験をもとに、ZOOM で念入りな打ち合わせを行い、インストラクショナル・デザインを決定した。

2.3. 仮説の設定

第三段階は仮説の設定である。本研究では、COIL がまだ新しい分野なので、仮説ではなく、より一般的な問いであるリサーチクエストを立てた。本授業実践では、遠隔会議システムを国際的な場で使い、COIL を異なる大学と二週間連続して行うインストラクションを設計した。便宜的に米国 A 大学、米国 B 大学とする。両方の COIL の内容はほぼ同一である。双方の学生がプレゼンテーションを行い、ディスカッションを行った。そこで、リサーチクエストは

1. COIL を米国 A 大学と B 大学と連続二週間行い、どのような影響があるのか。
2. 学生はどのような異文化の学びがあるのか。

とし、検証を行った。

2.4. 計画の実施

第四段階は、計画の実践である。日米で、学期の開始時期が異なるため、日本の前期では、日米で協働学習ができるのは、第3週と第4週となる。従って、この2週で COIL を実践した。

COIL は、二週連続で異なった大学と行ったが、授業の流れは基本的には同じであった。COIL のオンライン交流の時間は60分である。遠隔会議システムは ZOOM を使った。まずメインルームで、COIL の導入を行った。その後、1回目の米国 A 大学との COIL では大学生の数が少なかったため、メインルームで日本語のプレゼンを行い、続いて日本側はブレイクアウトルームを使い、日本人学生5名とアメリカ人学生1名でグループを編成し、英語でプレゼンを行った。二回目の B 大学との COIL では、日本語も英語のプレゼンテーションもブレイクアウトルームで行い、大学の地域やキャンパスライフについて説明をした。最後にもう一度メインルームに集まり、COIL のまと

めを行った。

COIL を実践するにあたり日米で、シラバスの調整、学生数の偏りの調整、時差の調整、学習環境の調整、また学生のプレゼンの指導等があった。特に、日米では時差が昼夜逆になるので、授業時間をどのように調整するかがひとつの鍵となる。本実践では、米国側が日本の授業時間に合わせた。

協働した二大学は、いずれも米国の名門大学で日本語を履修している学生であり、日本人や日本語、日本文化に強い関心があることが共通した特徴である。また日本人大学生は、英語とメディアを勉強しているので、英語を使った COIL に関心が高かった。

表 1. COIL のパートナー大学授業の比較

大学名	米国 A 大学	米国 B 大学
大学の地理的位置	中西部の私立大学	米国東部の公立大学
授業科目	日本語クラス	日本語クラス
COIL の参加人数	6 名	11 人
学生の国籍	アジア系大学生 5 名、米国人 1 名	米国人 10 人、留学生 1 名
英語	世界共通語としての英語(EFL)	英語母語話者
プレゼンの内容	キャンパス紹介、学生生活の紹介、文化紹介	キャンパス紹介、学生生活の紹介、文化紹介

2.5. 結果の検証

2.5.1. COIL 全般の結果

計画に基づき、連続で米国 A 大学と B 大学と COIL を実施した。図 1 は、当日の COIL に使用したパワーポイントの一例である。このグループは、東京ツアーを自主的に企画し、東京を 1 周するスカイバスに乗り、ビデオを撮影し、プレゼンテーションに動画を挿入した。この日本人グループでは、米国の大学生がコロナ禍で来日できないために、東京を紹介する企画を作り、プロジェクトに前向きに取り組んでおり、学生の COIL への期待と学習意欲が強く感じられた。

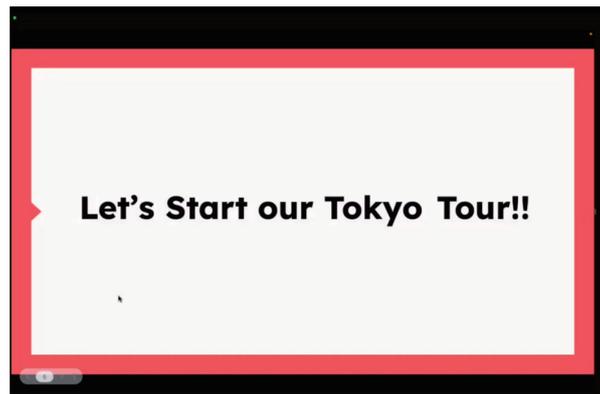


図1. COIL での日本人大学生による英語プレゼンのスライド

次のセクションでは、リサーチクエストの結果に言及する。まず、COIL を米国 A 大学と B 大学と連続二週行いどのような影響があったのか、次に学生はどのような異文化の学びがあったのかを述べる。

2.5.2. COIL を米国 A 大学と B 大学と連続二週行った影響

COIL における主要なアクティビティは、プレゼンテーションとディスカッションであったので、日本人学生はプレゼンテーションについて学びが深まり、スキルが向上した。以下は学生からのフィードバックである。

学生 A :

「1 回目の米国 A 大学との COIL と 2 回目の B 大学との COIL 比較すると、最初のプレゼンでは、韓国人の学生が無反応だったので、自分たちが考えているほど魅力的ではなかったのだと思います。声のトーン、笑顔といった顔の表情が欠けていたと思います。ビデオクリップを見せましたが、自分も参加者と一緒に見てしまいました。これらのことを踏まえて、作業を分担し、映像の途中で話し手を入れるようにしました。以上のような欠点があることから、もっと自信を持ち、表情や声のトーンを高くすることが必要であると考えました。また、映像が 3 分と長く感じられるため、映像の中にナレーションを入れました。2 回目のオンライン交流では、留学生の反応が良く、質問もいただきました。より魅力的で、こちらが伝えたいことを理解してくれていることが感じられました。今回の経験から、初対面の人と打ち解けることの難しさを知り、これが最大のポイントだと思いました。そのため、自分が思っている以上にプレゼンの準備をし、表情や声のトーンを変えるなどして、プレゼンに自信を持たせることが重要であると感じました。」と述べている。

学生 B :

「最初のプレゼンも、2 回目のプレゼンも、とてもうまくいきました。しかし 1 回目のプレゼンでは、内容を簡単に説明し、アメリカの学生に自分たちの基本的な考えを伝えることが出来ました。1 回目の発表で、もっと熱く、面白く発表できるように事前に練習しておけばよかったと思いまし

た。このような改善点を踏まえ、2回目のプレゼンテーションでは、より興味深い情報を追加し、私たちの文化に慣れていない人にも分かりやすいように、徹底して説明することを心がけました。」と述べている。

学生C:

「リスナーが私たちの発表にどのようなスタンスで参加しているかが、大きく異なることがわかりました。例えば、最初の聞き手である韓国人は無表情で反応もなく、何を考えているのか、どう進んでいるのかが分かりにくい。しかし、B大学の聞き手であるネイティブのアメリカ人学生は、発表中、常にうなずき、「ワオ」という声も発し、私たちの自信に繋がりました。私たちは常に自分のプレゼンテーションを観察していますが、聞き手のプレゼンテーションに対する姿勢や参加状況を見直すことも、重要な要素であると言えます。」と述べている。

このように、連続したCOILの経験により、日本人学生は、振り返りを即座に反映し、自己肯定感を高めた様子が見える。また話し手としてだけでなく、A大学とB大学の学生を比較することで、聞き手としてどうあるべきか、リフレクションを行うことができた。

2.5.3. 日本人大学生の異文化の学び

A大学、B大学とのいずれのCOILにおいても、日本人大学生には異文化の学びがあった。

学生C:

「私たちの学食の写真を見せ、『私たちの食事は500円以下くらいだ』という、アメリカ人学生は驚いていました。B大学の食事は質が低く、値段も18ドル程度で、全員がとても高いと感じていることに驚きました。」

学生D:

「アメリカのキャンパスライフは、日本とはかなり違うことを知りました。アメリカの大学生から大学のカフェテリアの話聞き、そのメニューの豊富さとサービスの幅の広さにまず驚きました。この大学には様々な国から来た学生がいるため、学食では日本食をはじめ、様々な種類の食事が提供されている。また、朝から晩まで営業しており、エッグベネディクトなどの朝食メニューや、ステーキなどの夕食メニューがあることにも感動しました。さらに、カフェテリアではクリスマスビュッフェなどのイベントが開催されることもあと聞き、興味を持ちました。これは、大学生の多くが大学の敷地内にある寮や、キャンパスの近くに住んでいるからだと聞きました。本学は都会にあるため、キャンパスから離れた場所に住んでいる学生が多いので、とても興味深かったです。」
以上のコメントに見るように、日本人学生は、異文化で生活をする同年代の大学生と直接に交流をし、様々な異文化を経験することができた。

2.6. 報告

本実践は、外国語教育メディア学会の全国研究大会で著者の安西(2022)が口頭発表を行い、実践の結果を普及させることに努めた。

3. 結論

今回の2週連続の異なる大学とのCOILにより、第一にプレゼンターとしては、グローバルな環境で、プレゼンの足りない部分に気づき、改善し、再度チャレンジし、改善を確認することができた。第二に、オーディエンスとしては、グローバルな環境では特に、反応することの大切さに気付き、改善を実体験できた。二週連続で行うことにより、学生のリフレクションが色濃く反映された学習経験となった。また二回のCOILを経験し、異文化に対する学びがあった。一回のCOILを外国の大学と行うのも様々な調整が必要であり、二回連続で同じコンテンツでプレゼンテーションを行える環境は恵まれたレアなケースではあるだろうが、それが可能な場合は、学生のリフレクションをスキル向上に直結することができる。今後、コロナ禍が収束しても、グローバル社会では、オンラインの活用は避けられないであろう。振り返りを即、反映できるこのようなインストラクショナル・デザインはスキルアップと異文化の理解の向上に役立つことが明らかになった。

謝辞

本研究は科研費(21K00730)の助成を受けたものである。

参考文献

- Anzai, Y. (2022.08.26). 「オンライン国際協働型学習(COIL) —東京外国語大学 ICU 青山学院大学 カリフォルニア大学アーバイン校のケース・スタディー」 Paper presented at The 61st JACET International Convention (Online).
- Anzai, Y. and Shimizu, H. (2022). Action research of Collaborative Online International Learning based on Educational Technology Theories. Paper Presented at ICoME 2022, Hawaii, (Online).
- 安西弥生 (2022.08.26). 同期型オンライン国際協働型(COIL)の実践—二週連続の米国二大学との交流外国語教育メディア学会(LET)全国大会.
- CASEL (2022). Fundamentals of SEL. Retrieved November 20, 2022, from <https://casel.org/fundamentals-of-sel/>
- Moore, M. & Kearsley, G. (1996). *Distance education – A systems view*. Belmont, CA Wadsworth.
- 九州大学 SALC (2022). 九州大学—サンノゼ州立大学—Collaborative Online International Learning (COIL). Retrieved November 20, 2022, from <https://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~salc/news2248.html>
- 文部科学省(2021). 平成30年度「大学の世界展開力強化事業～COIL型教育を活用した米国等との大学間交流支援～」の選定事業の結果について. Retrieved November 20, 2022, from https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/1408256.htm
- Nunan, D. (1993). *Action research in the language education* In J. Edge & K. Richards (Eds.), *Teachers develop teachers Research – Papers on classroom research and teacher development*. (pp.39 – 50). Heinemann International.
- Richards, J. and Lockhart, C. (1994) *Reflective teaching in second language classrooms*. Foreign Language Teaching and Research Press, Cambridge University Press.

- Shibata, Y. (2022.08.24). The impact of COIL-PBL on Social and Emotional Skills: A case study of Japanese university students. Paper presented at The 61st JACET International Convention (Online, 2022)
- Shimoyama, Y., Murata, A., Ikeda, K., Okamoto, O. and Ogata, H. (2022.0826). オンラインを活用したこれからの国際交流, Symposium conducted at The 61st JACET International Convention (Online).
- Asakawa, J. (2022). Japan Thailand collaboration for well-being society. Paper presented at ICoME 2022, Hawaii, (Online).
- Wu, W. -C. V., Yen, L. L. and Marek, M. (2011). Using Online EFL Interaction to Increase Confidence, Motivation, and Ability. *Educational Technology & Society*, 14 (3), 118–129.